(3)南原繁から学んだこと

1941（昭和 16）年 12 月 8 日の真珠湾攻撃は、日本中を高揚感で満たした。丸山はその日、師である南原繁（なんばらしげる：画像〈国立国会図書館「近代日本人の肖像」〉）を訪れている。

> 真珠湾攻撃の日――日本中が浮き足立った一二月八日に私は大学に来まして、すぐ先生の研究室に行き「先生、大変なことになりましたね」と。先生は非常に悲痛な顔をしてジッと目をつむって「これで枢軸〔ドイツや日本〕が勝つようだったら世界の文化はおしまいです」と言われた。(「南原先生と私」1977 年〈『丸山眞男話文集』第 1 巻)

国家や力の強弱をこえた正義の基準があり、日本であっても例外ではない。南原は日本中が国体の正義に燃えるなかで、超越的価値観から日本の行いを悪だと断罪していた。

> そういうものの見方を、あの困難な時代に堅持しておられたということが、私が南原先生から教わった最大の教訓の一つだったと思います。(同前)

現実に密着した視点しかもたない場合、経験的に存在するものの絶対化につながり、大勢に押し流されてしまう。現実をこえる視点に立つことで、「正しさ」という普遍的規準から経験的存在を判断できるようになり、時流に抗することも可能になる。対象から距離を

とる姿勢は、関東大震災の際に萌芽的に見られたが、南原との出会いによって、こうした精神的態度が丸山において確立したのである。

　このことは、現代における自由主義の存立基盤という大学時代以来の問題にもかかわっている。自由主義は、資本主義の一定の段階に対応するものであり、市民層の利害関心の表現として登場した近代の産物である。しかし丸山はそこに、特定の社会層だけに妥当するのではない、普遍的な価値を見出した。個人の自由を権利として保障するという近代自由主義の理念には、人が自己を賭すに値する価値がある。このように理念そのものが人を動かす力をもつことのうちに、自由主義の支えが求められていった。